

り」「玄鶴山房」「蜃気楼」などの作品

一宮の思い出は、「微笑」「海のほと

込まれています。





過ごしました。ここで龍之介は、

師で 後

近くのホテル一宮館の離れでひと夏を

た。彼は友人の久米正雄と、

一宮海岸

分一厘でも 文ちゃきたいのには違ひ

んのお母さ

まやお兄さんにも 文ちゃん自身 すは全く文ちゃん次第で きまる事僕が文ちゃんを貰ふか貰はないか

承知して

たした龍之介は、再び一宮を訪れまし

によって文壇に華々しいデビューを果

と名付けられています。

の手紙を書いています。

彼の滞在した離れは、

現在「芥川荘」 当時の茅葺き

に妻となる塚本文に宛てて、長い求婚 ある夏目漱石に手紙を書いたほか、

滞在しました。 に行ったといいます。 は町屋に滞在し、毎日のように海水浴 が誘ったと伝えられています。龍之介 の恋愛で悩んでいた龍之介を見かね と大正5年(一九一六)の夏、 最初の一宮滞在の時は、吉田弥生と 大正5年、「羅生門」や「鼻」など 一高時代の同級生だった堀内利器 一宮に

芥川龍之介は、

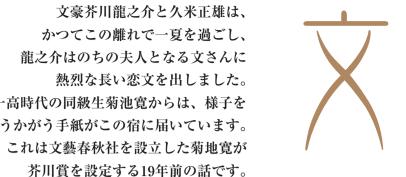
大正3年 (一九一四)

でした。今でも 好きです。その外に何もでした。今でも 好きです。その外に何もない人間です。ですから これだけの理由はありません。僕は 世間の人のやう理由はありません。僕は 世間の人のやうで 兄さんに 文ちゃんを頂けるなら頂きたいと云ひました。さうして それは頂くとも頂かないとも 文ちゃんの考へ一つでとも頂かないとも 文ちゃんの考へ一つできまらなければならないと云ひました。

が好きだと云ふ事です。さうしてその

ふ事です。勿論昔から、好き、その理由は僕は、文ちゃんは、たった一つあるきりで

賞ひたい理由は











して 早く又 あのあかりの多い にぎやかな通りを歩きたいと思ひます。しかし、かな通りを歩きたいと思ひます。しかし、東京がこひしくなるばかりではありません。東京にゐる人もこひしくなると云ふのは、東京の町はます。文ちゃんを賞ひたいと云ふ事を、僕が兄さんに話してから 何年になるでせう。(こんな事を 文ちゃんを賞ひたいと云ふ事を、僕が兄さんに話してから 何年になるでせう。(こんな事を 文ちゃんにあげる手紙に書いていいものかどうか知りません)

方や夜は 東京がこひ

みるので、忘れてゐますが 夕す ひるまは 仕事をしたり涼

奮発-

一つ長

はっ



文ちゃん。



一宮町を二度訪れた 芥川龍之介のラヴレター

僕のやってゐる商売は 今の日本で 一番 はならない商売です。その上 僕自身も なにならない商売です。その上 僕自身も をにならない商売です。それでも まだ少しは自信 をたまの方は それでも まだ少しは自信 があります。) うちには 父、母、叔母と、 としよりが三人ゐます。それでよければ来 で下さい。僕には 文ちゃん自身の口から かざり気のない返事を聞きたいと思ってゐません。 ます。繰返して書きますが、理由は一つします。繰返して書きますが、理由は一つします。 それでよりれば来 れでよければ来て下さい。

前祭が行われています。この文学碑に龍之介文学碑が建てられ、以来毎年碑

は、龍之介の書いた求婚の手紙が焼き

氏の賛同を得て、

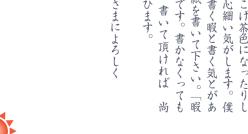
芥川荘のそばに芥川 龍之介の孫娘瑠璃子

平成3年には、

国の登録有形文化財となりました。 屋根はそのまま残され、平成13年5月、

ったら もう一度手紙を書いて下さい。「暇がここにゐる間に 書く暇と書く気とがあたり 弘法麦の穂がこげ茶色になったりしくなりました。木槿の葉がしぼみかかっしくなりました。木槿の葉がしぼみかかっ 文ちゃんの気 と気とがあったら」です。書 人に見せて

やうな事があっては、大へんですちゃんは、完く自由に、自分でどらかなければいけません。万一 自分でどっちとます。ですから 後悔する



これでやめます



一の宮町海岸一宮館にて

僕の方が、余程高等だとうぬぼれてゐます。が出来ません。その出来ない点で、世間よりが出来ません。その出来ない点で、世間よらべといか減な見合ひと、いい加減な身元しらべといか減な見合ひと、いい加減な身元しらべと が出た、 では作なく結婚と、 で 造作なく結婚と、 いか滅な見合ひと いいか滅な身で で 造作なく結婚といいか滅な身で で 造作なく結婚といいがなりで 1 氏の通りな なのです。僕から云へば 勿論と云ふ事は全く文ちゃん次第で